

定時制の夜桜

私が教員として初めて赴任したのは、五所川原高校の定時制でした。本当は東京で商社にでも入って生活したかったのですが、

親の希望で青森に帰り就職することになりました。家は裕福ではなかったけれど、私を東京の大学に出してくれ、その上大学院にも入れてくれた親には、感謝してもし尽くせない気持ちがあり、大学院修了と同時に後ろ髪が引かれる思いで東京を後にして、夜行列車に乗って帰省したことを今でも鮮明に覚えています。父はちよつとした商売をやっていたのですが、その仕事を継いで欲しいとは言わず、教員になることを望んでいました。もし県の教職員採用試験に受からなかった時は商売を継げばよいとは言いましたが、商売の苦労は自分達一代でよいと両親は思っていたようです。ですから、私が教員になった時は本当に喜んでくれました。父は後に、自分も教員になりたかったと話してくれたことがあります。幼稚園から小、中、高校、大学、大学院とずっと教育を受ける立場だったのが、二十四歳で突如教える側になるのですから、教員になったばかりの頃は戸惑うことばかりで、教員をやって行けるのだろうかと本気で悩みました。そんな新米教師の私を支えてくれたのは生徒達でした。特に初めて担任をした一年生十三人のことは今でも心に記憶しています。

当時、定時制の生徒達は全員が日中仕事をして夜学校に来るので、毎日何人かホームルームや一時間目に遅刻してくる者がいました。大幅な遅刻そして欠席する者は殆どいませんでした。

あれは教師に成ったばかりの連休前のことでした。二時間目の授業のとき大幅に遅れて一人の男子生徒が教室に入ってきました。後の戸を静かに開けて教室に入ってきた彼は、遠慮深げに教壇の私の所へやって来て仕事が長引いて遅れた旨を話しました。定時制の生徒達は仕

事場から真つ直ぐに学校に来る者も大勢いたので私服で登校しても良く、彼は鉄と油の匂いのするツナギでの登校でした。私は彼に「なるべく遅刻しないように仕事を済ませてきなさい」というような注意を与えました。遅刻者は、学校に来たら先ず職員室に寄って遅刻届を書き、それを持って授業に出ることになっていました。今でもそのような規則の学校があるのではないのでしょうか。彼はすみませんと頭を下げた後で遅刻届を私に出しました。そのとき彼の手を見て、私は言葉を失いました。彼の手は油で汚れたままで真つ黒だったのです。手を洗ってこなかったのかと聞く私に、遅刻したので少しでも早く学校に行こうと思つたと言つたのです。私は先に言つた人情味の無い自分の言葉を恥じる思いでした。彼は一生懸命に仕事をして遅刻せざるを得なかつたのです。私は彼に手を洗ってくるように言いました。そして他の生徒達に課題を出し彼が戻ってくるのを待つことにしました。

その日の放課後、私は真つ暗な二階の空き教室に行つて窓の外を眺めました。窓の外には桜の木が満開の花を付け一階の職員室やまだ生徒が残っている教室から洩れる灯りに照らし出されて、美しい夜桜を浮き上がらせていました。彼等のような苦労をしたこともない私が、一端の教員ぶつて生徒達に話す言葉のなんと情に欠けていることか。痛いほど教えられた思いがしました。そんな彼等の苦労と頑張り涙したことは、定年になった今でも忘れることはなく、思い出す度に若い時の苦い思いが込み上げては胸が熱くなります。教師を育てるのはまさに生徒達です。今日の教師に科された雑務は多すぎますが、先生方には出来る限り生徒達と触れ合う時間を多くして頂きたいと思つたのです。

(元青森県立北斗高校校長)